

2022年度 春季勉強会

『小児医療におけるココロと心臓』

公益社団法人 日本放射線技術学会 近畿支部
学術委員会

「小児医療における心のサポートーチャイルド・ライフ・スペシャリストの視点からー」
京都大学医学部附属病院 上山 美津穂

チャイルド・ライフ・スペシャリスト (CLS) は、小児医療の現場で、子どもや家族が抱える精神的負担を軽減し、主体的に治療・検査に臨めるよう支援する専門職である。本講演では、子どもにとって恐怖心の強い放射線検査の場面で、事前の心の準備、検査中・検査後のサポートを中心に、CLS の役割を紹介し、検査における子どもの理解や思い、子どもの乗り越える力を引き出す関わり、不安軽減を目指した多職種連携について報告、考察する。

「小児疾患における検査の心構えと放射線検査における技術的講演」

大阪母子医療センター 阿部 修司

小児の画像検査では、協力を得ることができない場合が多く、検査室に入るのさえ苦勞することを多く経験する。画像検査では、技師が期待する状態に体位を保持することも困難で、体位保持のために複数人による介助や体位を固定するための器具が必要な場合もある。呼吸停止による検査もできないため、体動などにより診断に適した画像が得られないこともあり、検査によっては睡眠剤を用いた鎮静が必要な場合もある。

小児の画像検査は、成人と同様の検査を疾患や診断の目的に応じて、組み合わせで行われる。実施される画像診断法は診断装置の発展に伴い変化しており、今後も変化が生じると思われる。

小児の画像検査では、最も重要な被ばく線量の低減はもとより、小さな大人として検査するのではなく、特徴を有していることを理解する必要がある。そして、その特徴を考慮したきめ細かな対応が重要である。最初の検査で無理強いや苦痛を与えてしまうと、将来にわたって後悔を招く結果になりかねないため、十分な理解を持って行わなければならない。

「小児疾患における画像診断」

大阪母子医療センター 西川 正則

小児の疾患は、症状が非特異的なことが多く、とくに患児がある程度の年齢に達していない場合では、自身がその症状をうまく伝えたり表現することができない、などの要素もあり、結果として臨床診断が難しくなる場合がある。その際、種々の検査データとあわせ、画像診断が有用なことも多い。なかでも CT がその中心的役割を果たすことが多いが、一方で小児は放射線に対する感受性が高いともいわれており、目的に応じ画像診断の modality を的確に選択しなければならない。そのためにはそれぞれの modality の特徴や限界などについて熟知しておく必要がある。

今回の講演では、まず胸腹部単純撮影における小児の正常変異について代表的なものを提示し、さらにいくつかの小児疾患（心疾患を含めて）における特徴的な所見や撮影・読影する際の注意点などについて、簡単に述べたいと考えている。

「先天性心疾患の画像診断と治療 —胎児から AYA 世代まで—」

大阪母子医療センター 石井 陽一郎

先天性心疾患（CHD）の治療成績は近年著しく改善し、新生児、小児期の治療を乗り越え成人期を迎える患者数も増加している。その中で CHD に対する画像診断も発達しており、その診断精度も向上してきている。

胎児心臓超音波検査による妊娠中からの胎児スクリーニング、心臓精査が浸透してくる中で、CHD は出生前に診断される頻度が経年的に高くなっている。そのうち約 1/3 の症例は出生直後からの治療介入を要する重症 CHD に分類されるため、産科、小児循環器科、心臓血管外科、ICU との連携を取り、速やかに出生後治療に移行できるようにしている。単心室/二心室、大動脈/肺動脈形態、チアノーゼの有無により治療方法は様々であるが、結果として重症 CHD の予後を改善し、より良い状態での小児期、AYA 世代を迎えることで、疾患を持っていても長期生存が可能となることを目的に治療を進めている。

本講演では、主要な CHD の画像や治療経過を提示しながら、われわれの行っている小児特有の循環器疾患について紹介する。